居酒屋やっとかめシリーズ

道化師の涙

成平一平太

晩秋の夕風がプラットフォームに降り立った真下祥吾の胸の内に積み上げた小石にあたり哀しみがこみ上げる。祥吾は溢れそうになる涙を堪えるかのように奥歯を噛みしめながら西出口へと歩いた。右手に下げられたトランクのキャスターが駅舎の床に戦いを挑むかのように音を立てている。

小田原駅の構内を抜けた祥吾は、カシオペア座を北の空に探しては見たがそれほどに暗い空でもない。祥吾は思い直したかのように県道７４号線を歩き欅通りへと向かった。いつもならそのまま自宅アパートをめざし、東に折れると欅通りを抜けて帰るのだが、誰かが待つわけではない独り暮らし。週に一度か二度は呑んで帰るのが習慣になっていた。とりわけ今夜は精神的な安定を保つためにも酒を呑まずにはいられない心境だった。

欅通りまで信号二つというところで祥吾は何とはなしに後ろに振り返った。視界の遠くに小田原城は、昼間の様相とは違い鬱蒼と繁る森を従えた天守閣が黒い固まりとなり不気味にさえ思える。この黒い固まりに今にも襲われそうな気配を感じ祥吾は直ぐさま向きを変えて足早に歩を進めた。

欅通りに出る少し手前の街灯もなく薄暗くなりかけた路地を祥吾は右に折れた。その先に見える白い大きな提灯が祥吾に手を振るかのように微かに揺れている。

「おやっさん、ちょっと早いけどいいかな」

格子の入ったガラス戸を開け、まだ客が誰もいない店内に視線を投げかけながら祥吾はカウンターの中の店主に遠慮がちに声を掛けた。

「どうぞ」

店主が視線を祥吾に投げかけなら手で「何処でもどうぞ」とばかりに無言ながらも迎え入れてくれた。

居酒屋「やっとかめ」は馴染みの客は誰もが店主を親しみを込めて、おやっさんと呼ぶ。客のほとんどが一人客だった。まれに二人ずれの客もないではないがそれ以上で連れ立ってくることはない。この店の暗黙のルールになっていた。時にはそれを知らずに何人かが連れ立って戸口を開けることがあって

もおやっさんは「予約が入っている」と丁重に断っていた。
祥吾がこの店ののれんを初めて潜ったのは二年ほど前になる。晩秋というよりは木枯らしが祥吾の身体を吹き抜ける初冬だった。
祥吾が高校を出ると同時に入った会社の取引先が不渡りを出したことで傾きかけた。祥吾の努めていた会社もその余波を受けたことによるものだった。出社と同時に全社員がテーブルとイスが部屋の隅に寄せられた食堂に集められた。二百人弱の従業員を前に、「三ヶ月の手形取引先であるB社が不渡りを出した。今月は免れることができたが来月、再来月と売掛金が焦げ付くことになる。売掛金の未回収も痛手ではあるが、我社にとって三本の指に入る大口の取引先の倒産は仕事量の減産に直結する。このままでは連鎖も視野に・・・・。何としてでも回避するためには事業の縮小もやむを得ないと決断した。よって人員の削減は不可避とせざるを得ない」
あたかも苦汁の決断たかのようにも思える社長の顔に歪みが見える。
冬の賞与はおろか給与カットにリストラの嵐が吹き荒れるとの宣言も同じだった。
小田原駅を降りて自宅のアパート戻る途中に白い提灯が何度も目に入ることはあっても、祥吾のこれまでの生活には、独りで居酒屋に入ることなどは無縁でしかなかった。
「リストラか・・・。おれなんか第一候補だろうな」
身寄りも無く施設で育った祥吾には、悔しさよりも諦めにも似た気を紛らわしたいと初めて暖簾を潜った。
今夜と同じようにカウンター席に腰を降ろし、ぐい呑みに注いだ酒を一気に呑み干すと同時に口を付いて出た。
「お客さん、世の中は悪いことばかりじゃありませんよ」
おやっさんが頼んでもいない赤味噌の豆腐田楽を「仕込みすぎたのでサービスです」と笑顔を添えて祥吾の前に置いた。
始めて店に訪れた客に惜しげも無くサービスと口にする店主に恐縮しながら田楽に舌鼓を打った時の事を祥吾は思いだしていた。それ以来、月に二度はこの「やっとかめ」の暖簾を潜るようになって二年が過ぎた。
以来、祥吾はどんな時にでも熱燗徳利と味噌田楽

を頼んでいた。今では、カウンターに座れば何かを注文することもなくカンターに置るほどに。
「おやっさん、少しいいですか？」
客が店主と会話を交えながら酒を呑むということなどは皆無といって良いほどの空気感が流れる『やっとかめ』ではあっても今日は、祥吾の他に客はい無い。
「どうされました？　今日はいつもと少し様子が違いますね。まるで初めてここを訪れていただいた時のようですね」
『やっとかめ』の店主は、祥吾が初めてここを訪れた日のことを憶えていた。確かにあの日は、悔しさや淋しさに悲しみを紛らわすための酒を祥吾の躰が欲しいていた。きっと酒が諦めの境地へと導いてくれるとの思いだった。そして今日もそんな思いに駆られての『やっとかめ』であることを見ぬかれていた。
「おやっさんの眼力には勝てませんね」
「そんなことはない。お客さんはいつも癒やしを求めてここに座られる。でも今夜は、あの時と同じように怒りが感じられます。そして、迷いも」
「えっ……」
祥吾の心臓が音を立てた。
「今日は、まだ他のお客さんがいません。私で良ければ迷いを吐き出して見てはどうです？　もっとも、ただじっと聞くだけで何のアドバイスもできませんが」
他に客がいれば、店の中で客同士ではあっても会話をすることなど暗黙の法度であった。だれもが自分の殻の中で静かに酒を楽しむ。憂さ晴らしの荒れた酒を呑むような客は誰一人としてこの店の暖簾を潜ることはない。この『やっとかめ』にやってくるのはそうしたことを承知の馴染みの常連ばかりだった。初めての客には、おやっさんが気をくばりながらそれとなく法度を説き、わがままな客はその場で追い出されていた。
「おやっさん俺ね、親も兄弟も無く施設育ちなんですよ。高校を出て中堅処の会社に就職したんです。でもね会社が傾きかけると真っ先にリストラされたんです。覚悟はしていました。身寄りが居ないのは会社にとってしがらみが無いと同じなんです。迷うことなく首が切れる。転職するにも、特にこれといって資格があるわけでもなく得意なこともなければ小さな企業でしか採用されません。でもね、今の会

社は小さくても良い会社なんです。もっとも、安月給なうえに将来性もありませんけどね。毎日、八時から夕方の五時。土日、祝日は休み。盆と正月は一週間の休暇。良い会社でしょ・・・。おやっさん、お銚子を」

祥吾は、出された熱燗をぐい呑みに注ぎ一気に口の中に含んでから喉をならした。

「時間だけは豊富にある。俺ね、考えたんです。この時間を有効利用してアルバイトをすれば金が稼げる。現に他の人もやっているのを知っています。会社も黙認ですよ。時間が確かな上に休みもきっちりしていればアルバイトもしやすい。二つの稼ぎを合せれば高給取りと同じとまではいかなくてもそれなりにはなります。子供を塾に通わせることも出来ると家庭持ちは頑張っていますよ。でもね、俺は違うことを考えた。どうせなら自分を楽しみたい。そして、他人をも楽しませたいってね。それで道化師を目指したんです。デビューしてまだ半年です。今はね、腹話術にも挑戦しているんです。街のイベントがあるとストリートパホーマーとして申し込むんです。いわゆる大道芸人です。幾つもの技を持っていると総てがパーフェクトにできなくても笑いも取れるしご祝儀も稼げるんです。一日の日当としては悪くありません。アルバイトなどよりははるかに多く稼げます。もっとも、天候しだいですけどね。さらに、強敵は猿回しです。いかに優れた大道芸人でも猿には勝てません。ピカイチです。今日はね、いつものおしゃれ横町に行ってきたんです。チリチリ頭の鬘を被って白塗りの顔。目元と口紅を大げさに化粧して作り物の鼻。道化師に変装して色んな芸を披露するんです。どれも専門家みたいには出来なくても立派にストリートパホマーとして成り立ちます。日本中を渡り歩く人も居るくらいです。安定はしませんが、普通のサラリーマンよりは稼げます。一緒に旅をしないかって誘われることもあるんです。でも俺は、地に足の付いた安定した生活があってこそのストリイトパホーマーだと思っているのでいつも断わっているんです・・・。おやっさん、もう一本、それと味噌田楽も」

祥吾は何杯目かのぐい呑みを口に入れると追加を注文した。

今日の『やっとかめ』は珍しく客足が鈍い。もっとも、まだ客が入るには時間が早いのかもしれない。店主は黙々と仕込みを続けながら祥吾の話しに耳を

傾けていた。
「おやっさん。おれね、やっとおれにも家族が出来たと思ったんですよ。でもね・・・。お人好しなんですかねおれは？　やっぱ、本当の父親と子供は暮した方が幸せですよね」
今日の祥吾は、いつものように繰り広げるパホーマーではあっても、手放した真由子と智哉の顔を思い浮かべながらの道化師だった。
祥吾は口に運ぶ熱燗とともに胸の奥に二つの小石を積み上げることでしか思いの丈を鎮めることができなかった。

一昨年の秋、休日の時間を潰す当てもなく横浜に出かけた時だった。路上で繰り広げられるパフォーマーを中心に人だかりができ、時おり拍手の音が沸き起こるのが聞こえる。なにかのイベントなのか三十分ほどのパフォーマンスが終わると見物人の何人かが路上に置かれた籠の中に小銭を入れる。中には千円札も交じっている。しばらく間を空けてまた別のパフォーマーが演技を始める。祥吾は半日をこの路上で繰り広げられているパフォーマンスに見入った。帰りの電車の中、じっと目を閉じ座席に背中をあずける祥吾。何を想像しているのか時折、手が動いている。顔にドウランでも塗って先ほどのパフォーマーのまねでもしているのであろうか。周りの乗客はクスクス笑いながら見て見ぬふりをしている。
翌週からは、仕事の休みを利用し、パソコンで何かを調べては出かけるようになった。カルチャーセンターにも通い、パントマイム、ジャグリング、マジックなど初歩的ではあっても多くの技を学んだ。自己流ではあるがそれらしくパフォーマンスができるようになるのに一年ほどを費やした。
洋服の裏地かと思うような生地で作った、星条旗を思い起こすかのような赤く太い縦縞模様のブカブカのズボンと黄色い燕尾服。燕尾服の胸ポケットからは赤いマジック用のハンカチが顔を出している。そしてその下に着こんだ白いTシャツには真っ青な蝶ネクタイがプリントされている。念入りに施した顔の化粧は道化師そのものだ。ピンポン玉をふた回りも大きくした真っ赤な鼻。緑色のシルクハットからはみ出した真っ赤なアムロヘアー。大きなキャリーバックの中には、先の尖った赤い靴の他にジャグリングに使うボールやディアボロ。手品に使う造花にトランプ。風船にポンプ。手直し用の化粧道具。

必然的に何泊かの旅行にでも行くのかと思うほどの大きなバックとなる。

祥吾が住むアパートの大半は電気もガスも元栓が絞められ、時の流れを感じさせるには十分なほどに傷みの激しい建屋ではあっても大事な生活の場となる。大家にしてみればすべての住人が出て行くのを待っているのが見え見えといったところなのかもしれない。六畳と四畳半の二部屋に小さな台所。トイレにキッチン、風呂までもが付いて三万二千円は破格の安さだった。築四十年にはなろうかという古アパートのあちこちのペンキははげ、まくれあがっている。鉄製の手摺も階段もさび、不用意に触ろうものなら手が赤く汚れる。祥吾はいつも注意深く階段の中央を降りて仕事場へと向かっていた。

「祥吾くん、いってらっしゃい。がんばってね」

二階の一番端の住人、菅谷多貴子が汚れることも気にせず手摺に身をあずけながら笑顔で手をふる。祥吾もそれに応えるかのように軽く手を振る。頭をチョコンと下げながら投げキッスを返し、左手は何もかもを大きく包み込むように真横に伸ばす。シルクハットを持った右手をへその辺りに置いて、深々と頭を下げなおす。道化師（ピエロ）としての今日の最初のパフォーマンスだ。

多貴子はこの安アパートの最古参の住人だった。年金暮らしの彼女は週の半分程度を健康維持を兼ねた清掃のパートに出ている。その甲斐があってなのか七十歳には見えないほどに元気だ。多貴子の夫は散々女遊びを繰り返したあげく、六十の少し手前でこの世を去ったと祥吾は本人から聞いたことがあった。肺癌だったらしい。それなりに財産も有り不自由の無い暮らしではあったが、広い家に独り住むには寂しいと、すべてを整理してこのアパートに越してきたらしい。子供もなく、十五年も前のことだと祥吾は聞いていた。このアパートには、多貴子の他に住人が二人いるがそれぞれ五十歳手前ほどの独身である。特に付き合いもなく素性も定かではない。勤めには毎日出ているようではあるが部屋から出てくることもなく月に一、二度、祥吾とは顔を合わす程度だった。いわゆる二人ともがおたく族なのかもしれない。

祥吾は、会社が休みにともなれば小田原駅前のおしゃれ横丁を目指す。十時過ぎに着くと真っ先に商店街会長が経営する呉服屋に顔を出した。

「おお真下君、おはよう。頑張ってな」

祥吾がおしゃれ横丁で月に二回のパフォーマンスをするようになって半年ほどになる。ここ以外にも、大型ショッピングモールなどにも定期的に出かけてはパフォーマンスを繰り広げている。

おしゃれ横丁は車両の通行止めとなる日曜日ごとに多くの人が行きかう。通りの中ほどに小さな広場が造られ、商店街の催し場となっている。一時はシャッター通りになりかけていたが、今の商店街会長の奮闘で昔の人通りを取戻し、活気をおびた商店街へと様変わりを遂げていた。その集客力の担い手のひとつとしてストリートパフォーマーの存在があった。

この横丁はパフォーマー横丁の別名を持ち、ゴールデンウイークに開かれるパフォーマンス祭りはマスコミにも取り上げられ、全国からパフォーマー達が集まる。横丁を四つのエリアに分けて二十組ほどのパフォーマー達がそれぞれのエリアを予定表に従って巡回し演技を行う。イベントの宣伝は横丁の各商店の店先に貼られた大きなチラシのみではあっても、いくつかのタウン誌が一か月ほど前から一斉に煽ってくれている。中には特集を組むタウン誌さえある。タウン誌には必ず切り取りの投票券がつけられている。投票券には通しナンバーが記載されイベントの最後に抽選会が行われ、スポンサーから提供された数々の商品が当選者に渡される仕組みになっている。上位三名のパフォーマーには賞金と特典が与えられる。パフォーマーにとっては栄誉の勝ち取りに力を注ぐと同時に大きな稼ぎにもなる。演技が終わり観客に差し出す籠の中にはいつもの二倍の心付けが投げ込まれる。

今年のパフォーマンス祭りで祥吾は観客側に回っていた。来年はエントリーしたいとばかりに他の観客とは違う目線を投げていたのは先週のことだった。

十一時を廻ると通行人が増え始めた。先の尖った靴に履き替え、身なりの最終チェックをウインドウガラスで済ませる。祥吾は大きなカバンの取っ手を伸ばし、白塗りの顔をゆがませながら十メートルほど先のいつもの立ち位置へと向かった。すでにパフォーマンスは繰り広げられているのだ。通行人のだれもが道化師の衣装をまとった祥吾に足を止め、見入った。

「ママー、あのピエロさんの大きなカバン重そうだね」

五、六歳の男児の言葉は通行人の目線をカバンに

集めた。その瞬間、祥吾はあるはずもない壁にでもぶつかったかのような仕草を見せながら尻もちをついた。
「あっ、何かにぶつかったよ？」
男児の言葉はさらに通行人の視線を祥吾に向かわせるに絶妙なタイミングで発せられた。それは前もって打ち合わせがなされたかと思えるほどであった。祥吾はおもむろに立ち上がり、左の手でわざとらしく尻をなぜながら大きなカバンをヒョイと持ち上げ、見えぬ壁を廻り込んで避け、残りわずかな立ち位置までスキップをしながら向かった。
「ママー、あの人、面白いね。カバンも重たくないみたいだし、何にもないのにぶつかって転んで」
「ほんとね。ちょっと見ていこうか？」
母子に誘われるように何人もの通行人が祥吾の周りを囲んだ。
祥吾は地面に線でも引くかのように、自分を中心に円を描く。観客との間合いを決めるためだ。「さあ、これから始めるよ」と、いわんばかりに緑の帽子を右手で取るとへその辺りに付ける。さらに、左足を少し後ろに引いて腰を曲げながら深々と頭を下げた。誰からとなく自然に拍手が沸いた。
祥吾が道化師へと変わる線引きでもあった。パフォーマンスはすべてがサイレントで構成されている。どの演目でも言葉は一切発することはない。手や顔の表情に合わせ躰全体を使って観客に信号を送る。観客はその時々で笑い、感動し、時には食い入るような視線を道化師に投げかける。
さっそく道化師はカバンから赤や青のゴムボールを取り出し地面に並べた。すると一個のボールが一番前に陣取った先ほどの男児の前に転がった。狙い通りだ。道化師は満面の微笑みを浮かべ頭を下げると男児の前へと足を一歩踏み出した。二歩目の足を出すと同時に誰にも見えない壁に再びぶつかり、さも痛そうに額を撫ぜ、壁の大きさを探った。壁は回り込むことができないほどに大きく道化師は頭を抱え途方に暮れる。迫真の演技が観客の心をとらえ始めたのか、道化師の周りは静かさの中にも押し迫るかのような視線の圧が円の中央へと覆いかぶさる。パンダの逆をいくような目の周りの白塗り、濃い目のアイシャドウが瞳の表情を増幅させる。赤く塗った大きな唇の動きも周りの白塗りが細かな動きを豊かな表情へと変化させる。薄紅の頬、ピンポン玉を二回りも大きくしたような鼻。この顔のパーツ一つ

一つが豊かな表情を造りだすのに大きな役割を持っている。さらにそれを支える躰全体を駆使したボディランゲージ。これこそが道化師の命とばかりに波動を切れ間なく送り続ける。言葉を発しない真剣勝負が道化師と観客の間に繰り広げられる。観客の息遣いを探るかのような大小さまざまな間合い。

男児は手にしたボールの扱いに困ったかのように母親の顔を見上げる。その瞬間、道化師は何かをひらめいたかのように手を叩き、再び満面の笑顔を浮かべ男児を円の中央へと招き入れた。母親に背中を押され、男児がどこにあるのかわからない壁を探るかのように手を突き出しながら足を踏み出す。どこからともなく「クスクス」と小さな笑いが漏れる。

「ピエロさん、ぶつかるものなんてなかったよ」

男児の素直さに小さな笑いが大きく広がった。道化師は男児の目線に合わせるかのように腰を落とし、ボールを受け取るとそっと抱き寄せた。オーバーアクションではあっても心を込めた仕草は男児の心を解きほぐす。

道化師は上着のポケットから棒付の飴を一本取り出し、おどけ顔で微笑みながら男児の手に持たせると手を振って母親の元へと押し出した。

「今日の演技は、この子を中心に組み立てれば成功する」

声に出すことなく道化師はつぶやいた。

いつもパフォーマンスが成功するとは限らない。幾つものレパートリーを持ってはいてもすべてを披露するわけではない。総花的に演技を繰り広げても客の視線を釘付けにすることはできない。この一年ほどで何度も経験し学習はできている。

もう一度ボールを手にするとジャグリングを始めた。三個から四個、五個目のボールが手から離れると同時に拍手がわき上がる。道化師の手はせわしなく落ちてくるボールを左手で受けると同時に右手に送り、そして再び上に放り投げられる。

大きなカバンを引きずるところからここまで観客の目を引き寄せ続けることができている。四十分あまりの演技の滑り出しは順調のようだ。どんなパフォーマーも演技の途中で何回も繰り返しこの確認を観客の動向から探る。受けが悪いと感じることもあれば、のっていると感じる時もある。どちらであろうとその原因はパフォーマーが醸し出すオーラに掛かっている。聡史が最も強敵とするパフォーマーは、日本猿のとん太とよし子である。愛くるしい動きと

表情。宙返りに輪潜り、切れの良い技は小さな子供から大人まですべての観客の心をわしづかみにする。その結果、すべての演技が終わり観客の前に差し出されるざるの中には多くの心付けが投げ込まれる。

「あいつらに勝てるなんてことは・・・」

奴らはプロとしてこのパフォーマンスで生計を立てている。祥吾の道化師としてのパフォーマンスは生業ではない。時には製造員として得る給料よりも多い心付けを得る月もある。それでも趣味の領域を出ることはない。長い人生の中にあって不安定な要素を持つパフォーマーでは安定した家族生活は送れない。祥吾の生い立ちが物語っている。

祥吾が施設に入ったのは小学三年生の時だった。車に飛び込んだ両親にどんな事情があったのか詳しくは知らされてはいない。しかし、物心ついたころから毎日がひもじい思いの中で生きてきたような記憶が離れない。だれもがみんな同じだとも思っていた。そうではないと思い知らされたのが小学校にあがってまもなくだった。多くのみじめさを味わいながらの学校生活ではあったが負けまいと勉強に励んだ。ゲーム機や高価なおもちゃなど与えられることがない分、持て余すほどの時間を独りで過ごさなければならない。おかげで成績はいつもトップだった。進学校といわれた高校でも成績は維持できたが大学への道は選ばなかった。多くを望んでいるわけではない。ごく普通の生活のなかで家庭を持ち、子供たちと共に笑いたいと考えていた。しかし現実はそんなに甘くはなかった。結婚を考えた相手もいたが、施設育ちの高卒というだけで相手の両親に反対され、あっけなく去って行った。あれから二年、祥吾はいまだにその時のショックを引きずりながら道化師を演じている。

祥吾の演技は笑いを取り入れたマジックへと移り、コミカルな演技にだれもが惜しむことなく拍手をする。男児さえもが声をだして笑っている。そんな中に見覚えのある女の観客を、祥吾の目がとらえた。女の視線は道化師に向けられることなく定まってはいない。気に掛けながらも次の風船演技へと移った。

マジックさながらにいたるところから風船を取り出す。男児の耳の後ろからだったり観客の手のひらだったり。そして風船を膨らまし、さまざまな形に作り上げて行く。くま、ライオン、プードル、蟹と。

先ほどの女の観客の手が隣の老婦人のカバンの中を狙ったその瞬間。道化師は老婦人に駆け寄り幾つ

もの風船を取り出し、まわりの目を引いた。目的を失った女は観客の輪を後にしてどこかに消えた。
すべての風船の作品は観客に配られる。これで四十分の演技は終了となり、最後のパントマイムとなる。緑の帽子を取り、観客からの心付けもらうための最終演技となる。パフォーマーにとって最もわくわくもすれば緊張もする瞬間である。この瞬間に魅了されパフォーマーを続けているのかもしれない。
道化師が帽子に手を掛けたそのタイミング。先ほどから怪しい動きをしていた黒い雲が一気に商店街に覆いかぶさり、遠くで鳴り響く雷とともに大粒の雨が降り出した。観客は逃げ惑うかのように一斉に散ってゆく。道化師のことなど一瞬にしてなかったことにしてしまった雨。悪夢の滴が容赦なく道化師に降り注ぎ足元で小躍りしている。
「ピエロさん、ありがとう。たのしかったよ」
雨音にかき消されまいと大きな声を張り上げる男児に道化師は、雨に叩かれながら最後のマイムで応える。
雨に濡れ、色合いの変わってしまったカバンを手に祥吾は商店街の外へと向かう。躰に貼りつくような衣装では、いかに雨が上がろうと二度目のパフォーマンスを行うには無理がある。ひとまずはアパートに戻るしかない。言いようのないむなしさを感じながらただの通行人としてうつむき加減で足を運ぶ祥吾。そこには道化師としてのオーラーは何も発してはいない。派手な化粧と衣装をまとった陳腐な男でしかない。雷雨によって演技の頂点ともいえる道化師としての最高の笑顔を振りまくことができなかった無念さが足運びにも表れていた。
スクランブル交差点に出ると雨が上がり、まばゆいばかりの太陽が雲間から顔をのぞかせる。大きな虹が祥吾の沈んだ心をなごませる。信号待ちをしていた祥吾の目が向こう側の喫茶店に釘づけとなった。道路側に設けられた長いテーブルに何人もの客がコーヒーを飲んでいる。スマホをいじりながらの客や、なにかに目を落としながらコーヒーカップを手にしている。ただぼんやりと外を眺めている客もいる。
「やっぱ、真由子だ」
祥吾は、客の中に見覚えのある顔を見つけた。道化師のパフォーマンスに夢中になっていた老婦人のカバンの中を狙っていた若い女。何に目をやるでもなくぼんやりと外に視線をなげている。何を思ったのか祥吾は歩行者用の信号音に押されるように道化

師の顔に戻った。通行人の足が一歩前に出かかったその時、道化師は持っていたカバンを手放し、マイムを始めた。通行人にとっては妨げでしかない。道化師を避けて横断歩道に足を踏み入れる。だれもが怪訝そうに振り返りながら足を運ぶ。そんなことを気にすることもなく道化師はマイムを続ける。通行人の足を止め観客としての輪をここに作ろうとしているわけではない。交差点の向こうの喫茶店でコーヒーを飲んでいる白井真由子の目を引くためだけに演じていた。三回目の信号音が交差点に響いた。真由子の視線が道化師に投げられている。こころなしか真由子の顔がゆるんでいるようにも見える。四回目の信号音とともに聡史はカバンを手にした。喫茶店をめざして交差点を渡るとガラス越しに真由子の前に立った。

「真由子、おれだよ。祥吾」

キョトンとしている真由子に、祥吾はもう一度、大きく口を開けゆっくりと「おれだよ、しょうご」

女の顔がゆるんだ。懐かしさがあふれ出しているのがわかる。人恋しさと言った方が正しいのかもしれない。その瞬間「しょうご兄ちゃん？」と女の口がゆっくりと大きく問い直した。

白井真由子と祥吾は同じ児童養護施設で育った。とはいっても真由子の方が施設での生活は祥吾よりも長いものだった。白井の性は真由子が施設に預けられた当時の市長の性であり真由子のなずけ親でもあった。二重瞼の愛くるしい顔とは裏腹に、常に影をもった真由子ではあったが、祥吾が施設にやってきてからはいつも祥吾の後を追いかけなついていた。

「真由、元気か？　今、どうしている？」

祥吾は真由子が老婦人の手提げの中を狙っていたことには触れることなく気遣った。

「うん、元気でやっているよ」

真由子も財布を狙っていたことに気付かれ邪魔をされたことに触れることなく明るさを装った。陰の部分を隠すための明るさでもあった。

「真由、お昼は？　久し振りだし、ごちそうするよ」

「ほんと、ラッキー。でも、そのかっこうじゃあね・・・」

「さっきの雨でずぶぬれ、いったん着替えに帰るさ。行って帰って・・・十二時半にはここに戻ってくる」

祥吾は真由が老婦人のカバンの中身を狙うような行為をやめさせたかった。おそらく初めてではないだろう。いつかは警察に捕まることになる。真由の

これまでの人生は祥吾と同じようにけして平坦なものではなかったかもしれないが、だからこそ平穏な暮らしをして欲しいと願った。
「私も祥吾兄ちゃんについてゆく。独りで待ってるのやだもん」
わずかに二十六年ではあるが、真由子のこれまでの人生は待ちの連続の人生だった。産まれたばかりで捨てられ、乳児院にあずけられた。名づけ親は当時の市長だった。
一年半を乳児院で過ごし、そのあと児童養護施設での生活を余儀なくされた。それでもいつかは産みの母が迎えに来てくれると信じて待った。いや、今でもその思いは断ち切れてはいない。高校を卒業すると同時に製菓工場の寮生活を始めた。他人ばかりではあっても施設の生活はそれなりに賑やかだった。プライバシーを確保するための社員寮の個室には小さな笑い声も笑顔も落ちてはいない。自立した人生を歩まなければと自分に言い聞かせはしてもこれまでにない孤独さと将来における不安に駆られる毎日。涙することも一度や二度ではなかった。同じように寮生活をする同僚とも仲良くはできても盆や正月には独り寂しく寮に取り残されることになる。
「いつか私にも本当の王子様が迎えに来てくれる」と、淡い夢に抱かれ、まだ見ぬ男(ひと)を待ち続けている。何人かの男が真由子の容姿に引かれ現れもした。が、付き合いは始まるものの親戚も肉親もいない施設出身と知ると躱だけを求め消えていった。真由子は何度かの学習の末、独りで生きてゆくことを選択した。そして目的を成すためにひたすら貯蓄する決意をしていた。もっとも真由子の稼ぎでは生活するのがやっと。わずかに残る小銭を郵便局に持ち込むものの残高が目に見えて増えて行くには程遠い現実があった。
魔が差した。まさにこの言葉がぴったりなほどのことが真由子の目の前に現実としておこった。ショッピングモールの一角に設けられた休憩所で缶コーヒーを飲んでいた時だった。隣に座っていた裕福で品のありそうな老婆が、手提げカバンを椅子に置いたまま席を立った。カバンの中身は丸見えの状態だった。「おばさん、カバン忘れてるよ」真由子は出そうになった言葉を呑み込んだ。老婆が視界から消えると真由子は辺りを見回しながらそっと腰を上げカバンの前に立ち中を見た。大きな財布が露出している。

真由子の心臓が大きな音を立て始めた。震える手がカバンの中へと伸びる。財布を開けると一万円札が十枚ほど入っていた。真由子は三枚だけを抜き取ると財布を戻しその場を離れた。さらに大きく心臓が音をたて、震えは全身へと広がっている。一刻もこのエリアから遠く離れなければと思いつつも大きな木の鉢植えの陰から老婆が戻ってくるのを待った。長い時間が流れたような思いはあったが、老婆が席を離れて五分も経ってはいない。巡回の警備員が置き忘れのカバンに気が付き方向を変えた。同時に老婆が小走りで席に戻ってきた。

「お客様の持ち物ですか？」

警備員が優しく声を掛ける。

「すみません。そそっかしくて」

老婆が恥ずかしそうに応える。

「お財布がすぐに見えるところにあるようですが、中を確認してみてください」

警備員に促されて老婆が財布を開けて見たものの異常に気付くことなく軽く頭を下げその場を去って行った。カバンが本当にあの老婆の物なのかなど確かめることなく警備員は老婆を見送る。老婆の身なりと物腰はあの高級そうなカバンと吊りあって見えたのだろう。

あれ以来、真由子は人込みの中を好んで歩くようになった。しかしチャンスはめったにはやってはこない。人生を台無しにはしたくはない。無理などしなくても正職にもついている。この半年で三回ほど心臓を高鳴らせた。今日が四回目の出来事だったが祥吾の目に止まり、手を伸ばすことなく心臓の高鳴りは消えた。

「真由、ここで待ってて。すぐに戻ってくるから」

祥吾はアパートに着くと真由子を待たせ、せわしない音を立てながら古びた階段を駆け上がった。

「あら、お嬢さん。祥吾君のお知り合い？」

祥吾が部屋に消えると同時に、菅谷多貴子（すがやたきこ）がコンビニの袋を下げて帰ってきた。このアパートの住人はわずかに四人であり、年齢と身なりからして祥吾の知り合いだと直感してのことだった。

「はい」

真由子は品のよさそうな老婆多貴子に戸惑うことなく素直に答えた。

「そう、でも彼ならおしゃれ横丁よ」

「いえ、雨でずぶ濡れで・・・それで着替えに」

「あらそうなの。だめね、祥吾君も。こんなきれい

なお嬢さんを外で待たせるなんて・・・いいわ、私の部屋にいらっしゃい美味しい紅茶を入れてあげるわ」
「でも・・・」
「大丈夫、祥吾君にも声を掛ければ。さあ、いらっしゃい」
　真由子は複雑な思いだった。祥吾の知り合いとはいっても十年ぶりでの再会である。今の祥吾については何も知らない。ましてやストリートパフォーマーをしている祥吾と秀才と言われた祥吾を結び付けることすらできないでいる。誘われるままにここまでついてきたのは単に懐かしさからだけなのかもしれない。いや、道化師に見入っている老婦人のカバンの中身を狙ったことへの罪悪感と、何か言い訳をしなくてはとの思いからなのかもしれない。強引なまでの多貴子の手に引かれ真由子は階段を上がった。
「祥吾君、こんな可愛い女の子を外で待たしちゃあだめよ。私の部屋でお茶を飲んでいるから着替えたら寄ってね」
「えっ、あっ、はい」
　ドアの外からの多貴子の声に、何が何だかわからないまま聡史は返事をするしかなかった。
「でどうなの？　いつからなの？　祥吾君にこんなに可愛い彼女がいたなんて。ちっとも気付かなかったわ」
　多貴子は真由子に紅茶を差し出しながら自分のことのように嬉しそうなに笑みを浮かべた。
「いえ、祥吾にい・・・。彼とは十年ぶりの再会なんです」
「あらそうなの。じゃあ、もとかれ？　何で祥吾君と別れたの？　あんないい子めったに見つからないわよ。もう一度やりなおしなさい。私が保証するわ。子煩悩ないい旦那さまになるわよ」
「えっ、あっ、はい」
　強引なまでの多貴子の押しに、思わず真由子の口から出てしまった。
「そう、良かった。このクッキー私が焼いたの。美味しいわよ」
　なぜか多貴子がはしゃいでいる。
「私から見てもお似合いよ。きっと可愛い赤ちゃんが産まれるわ」
　多貴子には兄弟がいない。おばやおじもすでに他界している。何人かの従妹はいるがお義理での賀状の付き合いでしかなく、街ですれ違っても顔すらわ

からない。わずらわしさが無く気楽ではあるがやはり孤独は寂しい。そんな中にあって気さくに声を掛けてくれる祥吾が多貴子には息子のようにさえ感じていた。
「すみませーん。真由、出かけるぞ」
祥吾は、化粧を落とし着替えを済ませると多貴子の部屋に飛び込むかのようにドアを開け、中にいるだろう真由子に声を掛けた。
「祥吾君、とりあえず中でお茶でも飲んでったら？」
多貴子は、せっかく親しくなりかけた真由子を部屋から出したくはなかった。多貴子の誘いをむげには断りきれない祥吾は靴を脱ぐほかはなかった。
「祥吾君、今日は散々だったんだって？」
真由子から一通り事情を聴いた多貴子は同情するかのように言葉を続けた。
「まあ、そんな日もあるわよ。さあ、どうぞ」
多貴子は紅茶を出しながら、祥吾の顔を見て聞きたいことが山ほどあるとばかりに目を輝かせた。
「多貴子さん、そんなにはゆっくりもしていられないんです。商店街の会長さんに黙って帰ってきてしまったので報告に・・・」
「あら、そうなの。ゆっくりと二人のことを聞きたかったのに・・・」
祥吾には、多貴子が何を聞きたがっているのかは想像ができた。多貴子が祥吾を息子のように思っているのと同じように祥吾もまた、多貴子のことを身内のように慕っていた。だからといって今、真由子のことについて話さなければならないようなことは何もない。同じ施設で育った真由子と十年ぶりに出会った。それだけのことしかない。
「真由、何食べたい？」
一着しかない道化師の衣装をずぶ濡れにしてしまい、この日のパフォーマーを断念した祥吾は、商店会の会長に詫びを入れたあと二人は肩を並べて歩いた。海鮮物が食べたいという真由子に合わせ、小田原港に揚げられた朝獲れの鮮魚を売りにしている店ののれんを潜ることにした。真由子はメニューを眺めて散々迷った挙句、女性向けの特別ランチを、祥吾は、おまかせランチを注文した。
「真由、元気だった？　今何してる？　どこに住んでるの？」
「いっぱい聞くのね？」
注文取りの店員が背中を向けるのと同時に祥吾が口を開いた。と同時に真由子は、次に何を聞いてく

るのかと身構えたのを誤魔化すかのように微笑んだ。
「俺は、高校を卒業と同時勤めたK製作所をリストラされて今はT工業で製造員として今も働いている。きっとこのまま定年までかな。休みの日には今日みたいにおしゃれ横丁で道化師を・・・、趣味と実益を兼ねて」
「ふーん。祥吾兄ちゃん彼女はいないの？」
「いないよ。なかなか難しくてね」
養護施設育ちであることがわかると人は離れて行くとの思いを込めて難しいと祥吾は口にした。
「私もおんなじ。高校を卒業と同時にF製菓の寮に入ってチョコレートを毎日作っているわ」
真由子は何もかも祥吾と同じだった。このままこの菓子工場で働き、年を取って行く。恋人ができてもやはり施設の出身であることがわかると去って行く。
「真由」
真由子はドキッとした。覚悟を決めて祥吾の後をついてきた。老婦人のカバンの中身を狙っていたことを咎められると。
「真由、休みの日に俺との都合が合えば道化師を一緒にやらないか？」
「ええっ、道化師？　私が？　むりむり」
真由子は絶対に無理とばかりに手と顔を左右に振った。
「そんなことはないさ、誰だってできている。おれが教えるよ。もっとも我流だけどね。最初のうちは助手をしてくれたらいい。稼ぎも折半だ。そうだな、一回のパフォーマンスで五、六千円にはなるから・・・、一日に最低三回は、気分次第で四回の時もある。ちょっとしたアルバイトかな」
祥吾は立て続けに話した。少し興奮をしているのかもしれない。いや、何としてでも真由子をパフォーマンスに誘い込みたかった。そうすれば他人のカバンの中身を狙う暇などなくなる。わずかかもしれないが小遣い程度の稼ぎにはなる。真由子にも祥吾の本当の胸の内が手に取るように理解できた。発覚すれば警察沙汰になる行為を責めることもなく、パフォーマンスをすることを勧めていると。パフォーマンスをすることになれば、まずは観客の前に立てるだけの練習をしなければならない。すくなくても当面は仕事以外の時間をこのことに費やす必要があった。
「本当に私にもできる？」

真由子も他人のカバンの中身を狙うことがどんな結果につながるのかは判ってはいた。前科者になるわけにはいかない事情も抱えている。これを機にやめることができるかもしれないと思い始めていた。
「もちろんさ。真由はお手玉が得意だったよな。おばあちゃん先生によく褒められていたじゃないか」
「祥吾兄ちゃん、あれから何年たっていると思っているのよ」
「大丈夫、三つ子の魂百までってね」
「なに、それ・・・」
「ボールのジャグリングは三、四個ならすぐにできるさ。それよりかマイムだな」
「マイム？」
「パントマイム。聞いたことない？」
「あるよ。何もないのにいかにもあるかのような振りをすることでしょ」
「そうそう、壁なんてないのに、いかにも存在するかのようにぶつかって痛がったり、壁をよけるふりをしてみたり、重たくもないカバンをさも重たいかのように大げさな振りをするあれ」
「そんなこと私にできるのかな」
「大丈夫、最初はぎこちなくてもすぐにできるようになるさ」
「ユウモアたっぷりにしないとだめよね」
「少しはやる気になってきたな」
「これからは、仕事が終わったら祥吾兄ちゃん家に通う」
「マイムの練習をしながら、ジャグリングと風船芸とマジックの相方の練習だな。一か月もすれば観客の前に立てるようになるさ」
「ええー、たった一か月で・・・」
「そう、一か月。それまでは多貴子さんに観客役をしてもらって人前に慣れることかな」
「わかった。やってみる」
真由子は祥吾から咎めを受けることはないと確信したのか安心しきったようにランチを平らげた。祥吾も真由子の笑顔から、あえて昼間のことに触れなくても二度と同じような過ちはしないと実感できた。同じ境遇で育った祥吾と真由子はともに有意義な時間をすごせたと感じていた。
「祥吾兄ちゃん、もう絶対にしないからね」
「わかってるよ」
食事を済ませ、別れ際に笑顔で手を振りながら真由子が口にすると祥吾も笑顔で応えた。

翌日から真由子は仕事を終えるとまっすぐに祥吾のアパートに通うことにした。もっとも、祥吾の方が帰りが遅く、いつも多貴子の部屋で待つこととなった。
「真由ちゃん、いっそのことこっちに越して来たら？　そうしなさいよ。そう、それがいいわ」
真由子が祥吾のアパートに通い始めて二週間ほどしてからだった。台所に二人並んで夕食の後片付けをしながら多貴子が突然口にした。
「えっ、多貴子さん家に？」
「違うわよ。祥吾君の部屋に」
「そんな・・・」
「だって、その方が何かと都合がいいわよ。どうせ、いずれはそうなるんだから。あなたたちにとって初めて本当の家族ってことになるのよ。家族っていいわよ」
真由子には戸惑いがあった。祥吾のことは子供のころから兄のように慕ってきた。久し振りの再会も嬉しくあったが兄としての思いからだった。男として見たことがなかったとはいわないが、それは小さなものでしかなかった。多貴子に言われて改めて男としての祥吾を意識した。しかし真由子には、多貴子にも祥吾にも言えないでいることがあった。そのことを隠したまま多貴子の話に乗ることはできなかった。
「旦那様の帰りを待ちながら台所に立つ。女として充実感のある幸せを感じることができるわよ。そして子供を産み育てる・・・」
多貴子も同じ幸せを感じながらこれまで生きてきたもっとも、子供を授かることのできなかった寂しさは今も消えることはなかった。
「ごめん、お待たせ」
八時少し前に祥吾が残業を終え、多貴子の部屋のドアを開けた。
「祥吾君、夕飯は？」
「いや、真由の帰りが遅くなるから練習の後で・・・」
真由子がパフォーマンスの練習に通うようになって毎日のやり取りだった。そして、そのまま多貴子の部屋に祥吾が上がり込み、居間をストリートに見立ててのパフォーマンスが繰り広げられた。
「いいわよ、真由ちゃん。本当に重いバックを引いているようにみえるわよ」
真由子は多貴子に褒められながら演技を続ける。毎日同じシーンの繰り返しだった。二人の道化師が

路地から重いカバンをそれぞれが引いて現れる。四メートルほどの間を開けて二人が向き合う。観客にお辞儀をし、投げキッスを送る。さあ、これからパフォーマンスを始めるとアピールして、それぞれがカバンを開ける。最初に披露するのは数個のボールを使ったジャグリング。祥吾のボールは白。真由子は赤。しかし、実際にボールは無い。あるように見せるのだ。しかも色がついているようにアピールしなくてはいけない。赤いボール一個だけを取り出し宙に投げ、落ちてくるのを受け取ると同時に消す。マジックを兼ねているのだ。しかしそのボールを受け取るのに失敗をして相方の方へと転がってしまう。二人ともが同じ演技をし、転がったボールを取りに行こうとするが見えない壁にぶつかってしまう。何度試みても壁がある。回り込もうとするが壁は大きく途方に暮れる。そいて今度は本物のボールを取り出し、誤って転がしてしまう。拾う役は観客だ。観客は小さな子供だったり、大人だったりと相手によって仕草を変える。そして最後にご褒美を上げてお礼を伝える。この十分ほどの演技を何度も何度も繰り返した。

「真由、もうすぐ十時だ。今日はここまでにしよう」

「真由ちゃん、もういつでもデビューできるわね。うまくなったわよ」

「ほんと、ありがとう多貴子さん」

真由子の住む寮は電車で十分ほどの所にある。十時十八分発の小田急線にのれば十時半には寮のドアを開けることができた。真由子はいつも祥吾の部屋で繰り広げた演技を、部屋の電気を点けるなり姿見に映る自分を見ながら何度も復習していた。その甲斐があってなのか上達がはやく、祥吾も多貴子も驚いていた。

「祥吾君、真由ちゃんにこっちに引っ越してくるようにって、言っといたからね」

「こっちって？　このアパートに？」

「そうよ」

「だって、ここ新しい住人は入れないんじゃなかった？」

「なに言ってるのよ、祥吾君の部屋によ」

「えっ、おれの部屋？」

「そうよ、一緒に住めばいいのよ。籍を入れなさい。誰も邪魔する人なんていないでしょ。大丈夫、真由ちゃんだってまんざらじゃなかったわよ」

真由子のパフォーマーとしての練習に多貴子を巻

き込むことになってから毎夕食を多貴子の部屋で取ることにした。多貴子が言い出したことだった。ただし、二人の食費は祥吾が負担することで多貴子と合意ができていた。もっとも形ばかりの食費であり、持ち出しの方が多くはあったが家族の真似事ができると多貴子は喜んだ。遅めの夕食をとる祥吾に多貴子が真由子との結婚を勧める。というよりは因果を含めると言った方が正しいのかもしれない。

「いいわね、祥吾君。あした真由ちゃんが来たらこっちに来るように言うのよ」

「・・・」

祥吾には返事ができなかった。真由子は美人だし性格も申し分はない。共に施設育ち、何よりも気心がしれている。だが、女というよりは妹として見てきた。

その夜、祥吾はなかなか寝付けなかった。

「祥吾君、いってらっしゃい。いい今夜、真由ちゃんに言うのよ」

翌朝、祥吾が出かけるのを察知した多貴子が手すり越しに祥吾に手を振った。祥吾もそれに笑顔で振り向き応えた。

「真由、近いうちにおれの部屋に越してこないか？会社には結婚するから寮を出るって届ければいい」

次の日、練習を終えて帰り支度の真由子の背中に祥吾が投げた。

「ありがとう。祥吾兄ちゃん」

真由子はそれだけを口にし、振り向くこともなく駅へと急いだ。

「おかしいわね？　真由ちゃん。何か問題でも抱えているのかしら。二つ返事でＯＫすると思ったんだけど・・・」

「いいよ、多貴子さん。この話はもうしない。真由がその気になるまで待つさ」

祥吾は妹としてではなく一人の女として真由子を見つめなおした結果の結論ではあった。が、真由子にも兄としてではなく男として見つめなおすには時間が必要なのだろうと思った。

翌日、翌々日と祥吾の携帯電話に今日の練習は休むと真由子からメールが入った。その都度、祥吾は了解とだけ打ち返した。真由子が練習を休むようになって五日が過ぎた日曜日の朝、祥吾は道化師の衣装を着てアパートの階段を降りた。心なしか、寂しさが背中に漂っているかに見えなくもない。

「祥吾くーん。待って」

アパートの手すり越しに多貴子が祥吾に声を掛ける。
「真由ー」
多貴子の後ろには聡史に負けないくらいの派手な衣装にメイクをした道化師が恥ずかしそうに立っていた。
「さあ、いってらっしゃい。新しいピエロのコンビのデビューよ。がんばってね」
多貴子が真由子の背中を押すかのように階下へと送り出す。祥吾の顔が急にほころび、右手を腹に当て、左の手を大きく広げながら膝を軽く折る。招き入れのマイムだ。二人の肩が並びカバンのキャスターが歓びを伝えるかのように音をたてた。その音に応えるかのように「私も後から行くからねー」と、多貴子が大きな声で二人を見送った。
デビューは大成功だった。いつもより観客が多かった。当然のようにご祝儀も多かった。その中には多貴子が出した千円札もある。四回の演技を終えたのは五時を少し回っていた。二人は商店街会長に挨拶をすませ多貴子の部屋に帰った。
「多貴子さんありがとう。大成功だった」
「そう、よかったわね。真由ちゃんもりっぱなパフォーマンスだったわよ」
「今日の上がりは全部、真由が持ってっていいよ。その衣装高かったろう」
「違うの、この衣装は多貴子さんからのプレゼント」
多貴子は練習に来ない真由子を気遣って道化師の衣装を揃え、真由子の寮を訪ねていた。
「そんなことより真由ちゃん、祥吾君に話さなければいけないことがあるのでしょ」
真由が練習を休んだのは、祥吾の思いは嬉しかったが素直に受け入れることができないほどの問題を抱えていたからだった。そのことをどう話せばいいのか真由子にはわからなかった。それを話すことによって祥吾の思いが変わることだってある。真由子は多貴子に何もかもを打ち明けていた。
「えっ、何？」
祥吾の顔に不安が走った。真由子が何を抱え悩んでいるのかと。一瞬ではあったが、真由子の両親と男の黒い陰が脳裏をよぎった。
「祥吾兄ちゃん・・・。実は、私には一歳と五か月の男の子がいるの。今は、横浜の乳児院にあずかってもらっているの」
「どういうこと？　乳児院にって？　だめだよ、ど

んな理由があろうと母子が離れて暮らすなんて。そんなこと真由が一番わかっているはずじゃないか。いいよ、おれが養子親になる。明日にでも横浜に迎えにいこう」

祥吾は間髪を入れずに真由子を諭すように口にした。どんな事情があろうと真由子の子供なら無条件で受け入れてやろうと心の底から思った。乳児院から救い出してやりたいとも思った。親の愛情を思いっきり味あわせてやりたいと思ってのことだった。

「ほらね、祥吾君ならそう言ってくれると信じてた」

多貴子は半分得意げな顔をした。真由子は大粒の涙を流しながら、子供を産み乳児院に預けなければならなかった事情を聡史に打ち明けた。将来を約束したにも関わらず相手の男は真由子が臨月を迎えると同時に姿を消した。相手の男が医師だったこともあり、製菓会社には偽の診断書を作成して六か月の長期休暇を取っていた。そして、男が用意したアパートに移り住んで出産の準備に入った。男は真由子のアパートに足繁く通っては来たが泊まることもなく帰って行った。そのことに真由子は不安を感じてはいたが何かを口に出すことはできなかった。医者という職業に対し、施設の出であることの負い目が真由子にはあった。やがて男は真由子の前から消え、独りで出産をすることになった。幸いに元気な男児が産声をあげ、智哉と名付けた。父親欄は空白のまま出生届出を市役所に出した。あとで判ったことだが男には妻も子供もあり、今は研究のために渡米しているらしいと。真由子は、智哉を独りで育てる決心をしたものの壁は厚く、人の勧めで乳児院の門をくぐることになったと祥吾に話した。

「もういいから、智哉くんと三人でここで暮らそうよ」

祥吾は、真由子を力強く抱き寄せた。

「ほんとうにいいの？」

真由子は祥吾の暖かい胸につぶやいた。

「ああ」

祥吾の腕にさらに力が入った。

「さあ、ご飯にしよう。おばあちゃんはこれからも三人のために力になるよ」

多貴子の声も涙交じりではあったが若い二人の新たな門出を祝うかのように笑顔がこぼれていた。

一刻でも早くとの祥吾の優しさに真由子も多貴子も智哉を受け入れる準備にかかった。既に街路灯の灯りが点く時間ではあったが、ベビー布団を始めと

したさまざまなものを買い揃えに走った。その晩、真由子は祥吾の部屋に泊まり、乳児院に九時には着けるようにと多貴子に見送られながら横浜に向かった。勤め先には聡史も真由子も熱が出たと理由を付けて休むと連絡をした。

愛くるしく動き回る智哉に祥吾も多貴子も癒されながらの賑やかな家族の誕生となった。幼いこともあって智哉は祥吾にも多貴子にもすぐになついた。

真由子は仕事を辞めて専業主婦となった。今は、離れて暮らした一年半を取り戻すことを優先した方がいいとの祥吾の提案だった。多貴子も、自分の部屋にいる時間よりも真由子と智哉のそばにいる方が長かった。パート勤めそっちのけの毎日だった。

あたらしい家族の生活は贅沢さえしなければ祥吾の稼ぎで充分に賄えた。月に六回ほどのストリートパフォーマンスは智哉を多貴子に預けることでこれまで通り続けることができた。安定した収入とはいかないがそれでも毎月十五万ほどの稼ぎにはなった。すべてを貯蓄にまわし、将来は多貴子を加えて四人で暮らす一軒家を購入したいと計画を立てていた。

幸せな家族としての滑り出しは順調だった。智哉も日毎に大きくもなり言葉も話すようになっていた。来月には二歳の誕生日を迎える。智哉の誕生日祝いの日に多貴子は祥吾と真由子にとっておきのビックな提案ごとを考えていた。二人が、将来のために家を建てたいと計画していることを聞かされていた。しかもその家には多貴子の部屋まであるという。コツコツなどと貯める必要などない。多貴子には使いきれないほどの資産があった。それを切崩して若い二人の希望を、いや多貴子の新たな夢を叶えたいと思った。祥吾も真由子も多貴子も智哉もそれぞれが孤独にさいなまれる暮らしをこれまでしてきた。いつも心のどこかで笑いに包まれた家族と呼べる心のよりどころを欲していた。家族を守るためにそれぞれがそれぞれの役割を精一杯果たすことへの歓びを味わいたいと思っていた。

「祥吾さんごめんなさい。やっぱり私には祥吾兄ちゃんでしかありません。智哉の父親が大学病院を解雇され、離婚したと知らせてきました。そして智哉の父親としてやり直したいと言っています。本当にごめんなさい」

祥吾が仕事から帰るとテーブルの上に真由子の手紙と離婚届、養子縁組の解消届けが置かれていた。

あとは聡史がサインをすればいいだけになっている。
「ばかだね、あの娘は。このままの生活を続けることの方がよっぽど幸せになれるのに。一度、逃げたんだよ、このクズ医者。クビになるような医者はクズに決まっている」
聡史の心境を思ってのことなのか多貴子自身の夢が壊れたことへのいら立ちなのか吐き捨てるような多貴子の口調は荒々しいものだった。
「しかたがないさ、智哉も実の父親のもとで暮らすんだ。そのほうがいいに決まっている。真由子にとっても・・・」
聡史は自分に言い聞かせるように大きなため息をひとつ吐いてつぶやいた。
「本当に祥吾君は人がいいね」
呆れ顔で多貴子は自分の部屋へと引き上げた。
翌日、祥吾は市役所が開くのをまって届を出し、職場へと向かった。
次の日曜日、空には大きな白い雲が眩しいほどの晴天。祥吾はいつものようにおしゃれ横町へと出掛けてマイムを始めた。
「ねえ、ママ。今日はピエロさん一人だね。それにあのピエロさん泣いてるよ」

完